

## [講演要旨] 関東地方沿岸の「謎の津波」 — 慶長 (1605) と延宝(1677)の房総沖津波の新史料

伊藤 純一(株式会社 ANET)、都司 嘉宣(東京大学地震研究所)

近世初期の津波については同時代史料が乏しく未解明の点が多いが、関東地方では慶長九年十二月十六日(1605年2月3日)に襲来したと考えられる「慶長房総津波」と、延宝五年十月九日(1677年11月4日)に襲来した「延宝(磐城・房総)津波」が、殊に重要である。筆者らは2004年の歴史地震研究会で「慶長房総津波」について検討し、新たに発見した千葉県鴨川市天面(あまつら)の西徳寺の慶長房総津波による被災について書かれた縁起を紹介した。発表後、身延山大学仏教学部教授の寺尾英智先生から、千葉県勝浦市興津の日蓮宗妙覚寺が河蔵する『上総国興津村広栄山妙覚寺継図写』という記録に慶長の津波のことが記されているとのご教示をいただいた。記事は次のようなものである。

「一、慶長九<sup>キノヘ</sup>甲辰十二月十六日、戌ノ時大地震、則時ニ津波入、諸兵ノ人馬鶏狗ニ至マテ海上ニ引出ル、船魚家皆山谷へ打上ル、前代未聞故、如ク此為後代物語記者也、」この文章が書かれているのは、この史料の後半、『日保門流本末建立目録(録)覚記之事』という、祖師日蓮上人の文永元年(1264年)の鎌倉説法から元禄2年(1689年)に至る記録の部分である。日付・時刻の明確な記述や、格別の誇張を含まない記述から、この記事が軍記ものや後世の史書からの引き写しでないことは明らかで、妙覚寺やその末寺に伝えられていた文書・記録類に基づいて書かれた可能性が高い。

興津地域は津波当時大多喜藩領であったが、『房総治乱記』の津波被災村落のリストには入っていない。この史料が寺院内部に伝える意図で記されたものであることを考えると、近隣で大きな被害を出したものの妙覚寺自体には直接の大きな被害はなかったと解釈できるのではないだろうか。とすれば、リストの記述を裏付けるものと言うことができるだろう。

この記録の末尾には、延宝五年(1677年)と延宝八年(1680年)の自然災害を列記した書き込みがある。

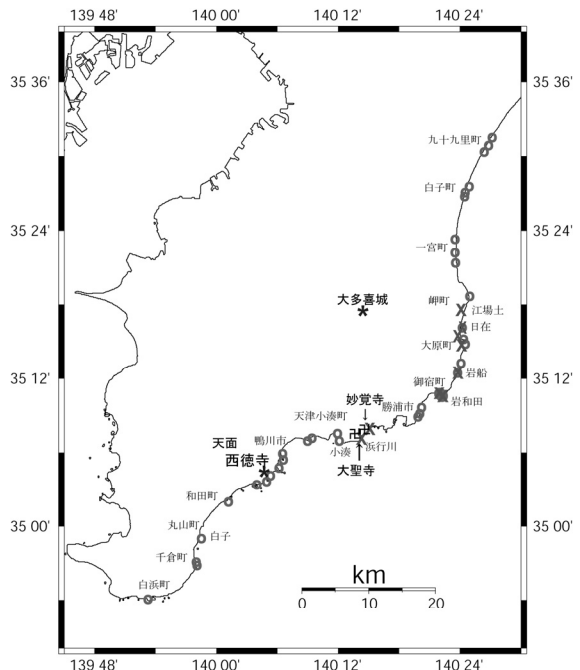
「延宝五<sup>ヒノト</sup>丁巳年九月三日丁丑巳ノ刻ヨリ四日<sup>ツチノヘト</sup>戊寅ノ日

未申刻迄、大洪水シテ山モクツレ田畑多ク損ス、川辺ノ者トモ大情流レ死ス、同九月廿日ノ頃より日夜五七度宛ニ地震シ、乍去大分ノ非地震ニ中小ノ分也、同十月九日入専ノ二日目ニテ<sup>ミツトツ</sup>癸丑ノ日ナリ、或ハ諸浜津波入人大情死ス、其夜ハ天ニ無雲一点モ、風木ノ葉ヲ不動、海ニ波不立、其後十四・五日ノ間ハ地震スル、又廿二日・三日ニ大雨降ル、又廿五日ニ昼夜十四・五度地震、其ノ後ハ五日ニ一度、三日ニ一度ツ、午ノ正月中比マテ地震ス、」(以下は土工や風水害の記事)

この書き入れは、妙覚寺の末寺である大聖寺(勝浦市浜行川(はまなめがわ)横道の大聖寺)の記録によるものであると記載されている。他の風水害の記事は同時代史料で確認でき、記事全体の信憑性も高い。

寺尾英智, 2005, 勝浦市妙覚寺所蔵「上総国興津村広栄山妙覚寺継図写」身延論叢, 10号, 54-67.

伊藤・都司・行谷, 2005, 歴史地震 20, 133-134



× 大多喜藩領海辺の村々 ○ 「房総治乱記」の記す被災地

図 1 慶長房総津波の被災地と勝浦市妙覚寺および大聖寺